援一 672
E24
1734

風来山人著

[illegible]画

風来六部集

東京金玉出版社

B 23475

0004782223

風来六部集

時(とき)に遇(あは)ざれば孔子(こうし)も茶(ちや)がら引(ひき)

だまし管仲(くわんちう)が鞠躬(きくきう)も能所(よいところ)へ乗込(のりこめ)ば

桓公(くわんこう)の揚(あげ)足(あし)とられて寄国(これ)[illegible]

ものゝ[illegible]せんじ風来山人(ふうらいさんじん)

其(その)名(な)ぐさの[illegible]天笠

森文庫

られぬ。一ツの助にもならんかと思ふもいらざる佐平治にてせめては寸
志の　國恩を報ずるといふもしやらくさし。其位にあらざれば其政を
謀らず身の程しらぬ大呆と己も知ては居るそふなれど蓼食ふ蟲も好々
と生れ付たる不物好なる塊りにかたまつて禄の下の力持むだ骨だらけ
の其中にしれ充てるせなりては。とらへる人が體より火を出し病を治す
る器を作り出せり。抑此器は西洋の人電の理を以て考。一旦工夫は
付けれども其身の生涯には事成らず。三代を經て成就しけるといへり阿
蘭陀人といへども知る者は至て少く　固朝鮮唐天竺の人は夢にもしら
ず況や日本開闢以来創て出来たる事なれば高貴が勞を初として見ん事
を願ふ者夥し或日去屋敷が儒官石倉新五左衛門といへる人来りて觀

る事良久して曰天地人の三才に通達なるを儒といふ。我天下の書に眼
をさらし理を以て推す時は森羅万象明からざる事有べからずと思ひ
しが今是を見て始て驚くそれ燧と石扁柏と扁柏相激するか又は日輪の
水精硝子を照し或は鏡に映ずる時は火を生ず。時に臨では目からも出髄
からも出。奴又貧なる家内へは。火の降事も有とは聞どもかゝる事は思ひ
もよらず。いかなる理にて火出るや後學の爲承んと其時主人うち點頭書
を讀計を學問と思ひ紙上が空論を以て格物窮理と思ふより間違も出来
るなりさらば火の出る根元をお目にかけんと取出を小冊に昔語花咲
男放屁論と題号せり。主人笑て申けるは抑此放屁といつぱ四年以前両
國橋の邊にて花咲男と号見せものにて近年の大當り諸の小戯場を撒

されど。其大勢の人間のしらざる事を拵んと。産を破り禄を捨工夫を凝らし金銀を費し工出せるもの此ふれたてるのみにあらず是まで倭産になき産物を見出せるも亦少からず世間の為に骨を折ば。世上で山師と譏れども鼠捕る猫は爪をかくす。我よりおとなしく人物臭き面な奴に却て山師はいくらも有。人は藝を以て山の足代とし。我は山に似たるを以て藝の助とす。顕るゝと隠るゝとは譬ばあん餅とあんなし餅の赤小豆の如し。まこと金をほしく思ふて是までの精力を一圖に金計銀に凝て一生鼹鼠見る様な親父と成。生爪はもがれても握たる金は放さず。徒然艸にある通り。仮にも無常を観すべからず。人は悪かれ我善れ。義理も糸瓜も瓢箪も沈香も焚ず屁も撒らず上手名人といふは扨置。下手といはるゝ藝もなく食て

屎して寝て起て。死だ所で残る物は骨と證文ばかりなりと。いふ様なわのちもならず彌出るなら無間の鐘の蛭は扨置蝮蛇や龍蟠魚を糞でおくせうに煮て食せても食氣に成てさめる時は盲できへも出来る金出来ざる事もあるまじく近ひ例はなれきてるを両國か浅草の見せ物に出る時は。押へ付たる大金豪猪綿羊なんどの例もありときゝむる者も多けれど陰陽の理を盡せし物を勿躰なしと合点せず。されば曽子は飴を見て老を養ん事を思ひ盜跖は錠を明ん事を思ふそれ相應の了簡。我は綿羊を見て日本にて羅紗らせいたごろふくれんしよんとろめんへるへとあんさるせ毛氈類の毛織を織らせ外國の渡りを待ず用に給せんと心を砕き人は手短に銭をせしめんと計る。いかに物いはぬ畜類じやとて毛を織て國家

可歎

追加

去ル申の歳菅原櫛といへるを工出し世ニ行ハれける時。好人より狂歌を給ひしその返歌並に序を爰に志るを

用ゐれハ鼠の子も上尖竿をおぼへ。用ゐざれハ虎皮褌も地獄の古着店に釣さるとハ。とつと昔の唐人の寐語眞實で呵らる丶より座なりニ譽らる丶が快え人情なれバ虚言と追從輕薄をいはねバ。人當世を志らぬといふ抑此當世といふもの今バかり有にあらず。祝鮀が佞有て宋朝が美あらずんバ難乎今の世に免まんとあれバ昔より有來の當世にして。八百藏が助六ハ拍筵が助六なれども。人今更の樣ニ心得るも片眼いたし。我も此當世を志らざるにハあらねども。万人の盲より一人有眼の人を思ふて假ニ

腹

不磨之言

も追從輕薄をいはざれバ時ニあハぬハ持前なり。されども人と生し冥加の爲

國恩を報ぜん事を思ふて心を盡せバ世人稱して山師といふ。予識て曰智慧ある者智慧なき者を識ニハ馬鹿といひたわけと呼あほうといひべら坊といへども智慧なき者智慧あるものを識ニハ其詞と用るとあたハぬ只山師〳〵と識るより外なし又造化の理を志らんが爲産物ニ心を盡せバ。人我を本草者と号草澤醫人の下細工人の樣ニ心得已ニ賢るのむだ書ニ淨瑠璃や小説が當れバ近松門左衛門自笑其磧が類と心得火浣布志れきてるの奇物を工めバ。竹田近江屋藤助と十把一トからげの思ひをなして變化龍の如き事を志らず。我ハ只及ばずながら日本の益をなさん事を

跋

風来山人放屁論後編をひり出して予をして屁へに跋せしむ按ずるに放屁字典に曰屁ブブウノ反音ブウ去聲に發して音スウ論語に所謂舞雩に風じて詠じて歸らんとはそれこれ是をいふ歟此書や始まりは狂言綺語のすかし屁を放り中は萬物の理を掌に握り屁の極意をこき末又合ふて一ツ屁の屁状をぶむ讀者その臭を逐はゞ高に升る階梯屁の一助たらんと云爾

葛西土民姑射杜老糞船の中に書を

痿陰隱逸傳自叙

童謠曰。如做出事來做得大則個。穿寧樂盧舍那佛屁眼則個。愉快哉言也。可以俾慷慨之士中靈勃起。若夫女媧煉五色之石而補三百餘度。塹漢高揮三尺之勢而破四百數年。小戸可謂做

平賀國倫通稱源内號風來山人精乎物
産之學又以奇工聞曾景慕深井榮
山為人傚其称志道軒自稱悟道軒遂
有志道軒傳痿陰隱逸傳根無艸等著
以放狂不羈終其作傳奇也別有福内鬼外
之號云山崎美成名家略傳所載

癸未七月

韋船生録

明治十六年四月三十日御届
定價金五拾錢
同　年五月　一日出版
東京麴町區飯田町三丁目十九番地
東京金玉出版社
東京金玉出版社之印
飜刻出版
出版委員
東京府平民
吉井幸造
神田區猿樂町三丁目壹番地